



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ウイльта語北方言テキスト : ありがとう、池上先生
Author(s)	山田, 祥子
Description	研究ノート
Citation	北方人文研究, 5, 159-172
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49302
Type	other
File Information	11journal05-yamada.pdf



〈研究ノート〉

ウイルタ語北方言テキスト —ありがとう、池上先生—¹

山田 祥子

北海道立北方民族博物館

はじめに

ウイルタ語は、ロシア・サハリン州の先住少数民族ウイルタUilta（旧称オロッコOrok）の固有の言語である。ツングース諸語（ツングース・満洲諸語）の一つで、そのなかでもナーナイ語・ウルチャ語とともに第Ⅲ群に分類される（Ikegami 1974[2001: 395]）。方言は、池上（1994 [2001: 247-248]）により、ほぼ北緯50度を境として、サハリン北部のワールVal（ウイルタ語でwaalu）を中心とする地方で話される「北方言」と、サハリン中部のポロナISK Poronajsk（かつての敷香）を中心とする地方で話される「南方言」の二つに分けられる。

本稿では、Irina Ja. Fedjaeva（以下、フェジャエワ）氏（1940年ワール生まれ、女性）ならびにElena A. Bibikova（以下、ビビコワ）氏（1940年ダーギDagi²生まれ、女性）から2011年8月17日に採録したウイルタ語北方言のテキストを、言語資料として提示する。内容は、採録の前月にご逝去された池上二良先生への哀悼の意を込めて、語り手それぞれが先生との思い出を語るものである。

語り手のお二人と池上先生の親交は、1990年に先生が初めてサハリンを訪問されたときに始まる。最初は、ワール村の北方言話者への仲介など、先生のウイルタ語調査に協力された。その後、いまや話者が少なく消滅が危ぶまれるウイルタ語の保存に向けて、文字策定と教科書の編集を共同して行うこととなった。本テキストの内容には、語り手たちにとって母語であるウイルタ語の記録・保存のために力を尽くし、仕事への弛まぬ熱意と人々への深い思いやりをもって現地の「伝承者」たちを刺激し勇気づけた池上先生への、敬愛と感謝の気持ちが表わされている。

1. テキストの概要

1.1 採録方法

本テキストは、以下の方法で採録した。まず、2011年8月16日ワール村のフェジャエワ氏宅にて、池上二良先生との思い出をウイルタ語で語っていただけるよう、フェジャエワ氏とビビコワ氏に依頼した。もっとも、筆者の依頼の前からすでに、お二人とも何らかのかたちで哀悼の意を表わしたいというお気持ちがあったようであった。そこで、お二人と相談のうえ、考えを整理したうえで、語りを録画・録音するというので快諾を得た。その後、各自で原稿を用意していただいた。

¹ 本研究の調査に応じてくださったElena A. Bibikovaさん、Irina Ja. Fedjaevaさん、ならびに、貴重なコメントをくださった匿名の査読者の方々に、心より感謝申し上げます。なお、本資料の採録は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「研究未開発言語調査派遣事業」（2010年度）の助成を受けた同研究所の共同研究プロジェクト「北方諸言語の類型的比較研究」に関する調査において行った。

² ウイルタ語でdaagi。

翌8月17日、フェジャエワ氏、ビビコワ氏の順で原稿を見ながら語っていただき、その映像と音声を採録した。採録時間は両名合わせて5分50秒だった。

採録後にお二人の用意された原稿を音声記録と照合したが、原稿を見ずに即興で語られた部分や、読むときに変更した部分が多く、両者の内容は必ずしも一致しない。本資料は、原稿ではなく、音声の記録を表記するものである。

1.2 表記・分析方法

本テキストでは、各文を1行目：ウイльта語音韻表記、2行目：ウイльта語基底形、3行目：英語グロス、4行目：日本語の意識、という段組みで表わす。

全体として、形態的な分析には、おもにIkegami (1956[2001], 1959[2001])、澗瀉 (1981)、池上 (1997, 2001)、Ozolinja & Fedjaeva (2003)、Tsumagari (2009) を参考にした。意訳は、語り手本人への聞き取りにもとづいて筆者が作成した。

各行について、1行目および2行目では、池上 (1997: xi-xvi) をもとに、母音音素/a, ə, o [ɔ], ɐ [o, ɔ], u, i, e/, 子音音素/p, b, t, d, č[ʧ], ʃ[ʃ], k, g[g, 母音間ではɣ~ɤ], m, n, ɲ, ŋ, l, r, s, x, w, j/によってウイльта語を表記する。音節構造は(C)V(V)(C) (C: 子音、V: 母音; 括弧内は任意) を基本とする。

他言語 (ロシア語や日本語) の単語は、1行目および2行目でロシア字表記の転写を斜体 (イタリック) で表わし、3行目では英訳を[]に入れて表わす。ただし、以下の例のように他言語の単語を、部分的にウイльта語本来の発音や類似の形式に近づけて変化させている場合は、他のウイльта語と同じように扱う。

例: (1-12)ほか	ロシア語	<i>professor</i> >	professori ³	「教授」
(1-20)	日本語	<i>ikegami-san</i> >	ikegamisaanu ⁴	「イケガミさん」

また、一人の話者が語っているところにもう一人の話者が口をはさんだ箇所は1行目で()に入れて示す (例: (2-2))。

2行目では、接尾辞や語尾の基底形を表わす際、母音調和によりa~o~ə~ɐと4交替する母音をA、o~ɐと2交替する母音をOで表わす。⁵

³ ウイльта語では、擬音語・擬態語を例外として、語末の子音は/m, n, l/に限られる (Tsumagari 2009: 3)。この語で末尾に/i/が添加されているのは、話者の直観により、語末に/r/が立つことを回避した結果だろう。ただし、この語の他の部分で、/pr/という子音連続や子音/f/[f]は本来のウイльта語の発音にないものである。

⁴ ウイльта語で男性の人名には、例えばAmuljikaanu, Bakaanu, Səmməənu, Naruŋgeenuなどのように末尾がVVnuとなるものがある。こうした傾向から、ロシア語名Nikolajをウイльта語式にNikolaanuと変化させる例もある (池上1997: 137)。ikegamisaanuというかたちもまた、ウイльта語の人名の形式からの類推による変形であると思われる。また、本文(1-20)のikagemisaannooは、対格語尾-bAが融合してできたと考える。ただし、こうした類推による変形は一時的・単発的なものかもしれない、どこまで通用するか注意が必要である。

⁵ ただし、今日の北方方言では/ə/の使用頻度が低く、とくに接尾辞・語尾の母音が/ə/に交替しない例が多々ある ((2-11) əbuddoopu (< ə-buddOO-pu: NEG-PURP-1PL) 「私たちが～しないように」など)。

2. ウイルタ語北方方言テキスト

2.1 フェジャエワ氏の語り⁶

(1-1)

geedara elena alekseevna bibikova orokčini bičči bii
geedara elena alekseevna bibikova orok-či(n)-ni bi+čin bii
once [Elena] [Alekseevna] [Bibikova] take-PRF-3SG COP-PRF.P 1SG.NOM
dukutaiwwee geeda narree.
duku-tAi-wwee geeda nari+bA
house-DIR-1SG one man+ACC

ある時、エレナ・アレクセーヴナ・ビビコワが私の家に一人の人を連れてきた。

(1-2)

dukutaiwwee iigəčči tari nari uččini, sorojee!
duku-tAi-wwee ii-kAčči tari nari un+či(n)-ni sorojee
house-DIR-1SG enter-SUB.CVB that man say+PRF.P-3SG how.do.you.do

私の家に入って来て、その人は言った、「ソロジェー」（ウイルタ語で「こんにちは」）。

(1-3)

bii noottoini itəgəčči mərəččiwi, xai narigəndə tari?
bii noottoini itə-kAčči mərəči+ri-bi xai nari=kA=ndA tari
1SG.NOM 3SG.DIR see-SUB.CVB think+IM.P-1SG what man=WHQ=HS that

私は彼を見て思った、「何者だというのか、この人は？」

(1-4)

uiltadairini, uiltaa əčči urrəə.
uiltadAir-ri-ni uilta+bA ə+či(n) urə⁷+rA
Uilta-LNG-IM.P-3SG Uilta+ACC NEG+PRF.P come.to.resemble+NIM

ウイルタ語で話すけど、ウイルタに似ていない」。

(1-5)

tari nari biččini dziro ikegami.
tari nari bi+či(n)-ni dziro ikegami
that man COP+PRF.P-3SG [Jiro] [Ikegami]

その人が、ジロー・イケガミだった。

(1-6)

taraŋači bii baačixambi čaa narree.
taraŋači bii baači-xAn-bi čaa nari+bA
like.that 1SG.NOM meet-PRF.P-1SG that man+ACC

このように、私は彼と出会った。

⁶ なお、2010年10月にワール村にてAleksandr M. Pevnov氏（ロシア科学アカデミー言語研究所）が、本稿2.1と同様のテーマでフェジャエワ氏が語ったテキストを採録している。Pevnov氏は2012年1月現在、そのテキストを発表準備中（掲載誌未定）とのことである。本稿の作成にあたり、筆者はPevnov氏と互いに草稿を送り合って内容を確認し、本稿2.1とPevnov氏の資料は内容の大筋がほぼ同じであるものの、細部の表現や採録や表記の方針が異なる別個のテキストとして、それぞれに発表することで了解を得た。Pevnov氏に記して感謝を申し上げたい。

⁷ 池上（1997: 221）でurə-は「発育する」という意味の動詞語幹とされる。一方、今日の北方言では対格をとって「～に似てゆく」を意味する。

(1-7)

tamaččuu	buu	uiləluxəpu.
tamaččuu	buu	uilə-lu-xA(n)-pu
from.there	1PL.NOM	work-INCH-PRF.P-1PL

それから、私たちは仕事（調査）を始めたのだった。

(1-8)

dziro	ikegami	xasultaddaa	puličini	waalutai.
dziro	ikegami	xasu-ltA=ddAA	puli-či(n)-ni	waalu-tAi
[Jiro]	[Ikegami]	how.much-MULT=EMPH	walk-PRF.P-3SG	Val-DIR

ジロー・イケガミは、何度もワール村へやって来た。

(1-9)

uiləxəni	sagji	uilta	əkkəsəljiini.
uilə-xA(n)-ni	sagji	uilta	əkkəsəl-ji-ni
work-PRF.P-3SG	aged	Uilta	women-INS-3SG

年とったウイлтаの女性たちと仕事（調査）をした。

(1-10)

tari	gisiktəudə ⁸	mixeeva	marija	stepanovna,	oolganjaa ⁹	moja	mama
tari	gisiktəudə	mixeeva	marija	stepanovna	oolganjaa	moja	mama
that	Gisikteude	[Mixeeva]	[Marija]	[Stepanovna]	Olganja	[my]	[mama]

semjonova	ol'ga	nikolaevna,	moja	tjotja	semjonova	anna	vasil'evna,
semjonova	ol'ga	nikolaevna	moja	tjotja	semjonova	anna	vasil'evna
[Semjonova]	[Ol'ga]	[Nikolaevna]	[my]	[aunt]	[Semjonova]	[Anna]	[Vasil'evna]

bibikova	elena	alekseevna	i	bii.
bibikova	elena	alekseevna	i	bii
[Bibikova]	[Elena]	[Alekseevna]	[and]	1SG.NOM

それは、ギシクタウダーミヘエワ・マリヤ・ステパーノワ、オールガンジャー—私の母セミョーノワ・オリガ・ニコラエヴナ、私の叔母セミョーノワ・アンナ・ワシリエヴナ、ビビコワ・エレーナ・アレクセーヴナ、そして私だった。

(1-11)

taraŋači	buu	čipaalinnee	oččipu	informantami.
taraŋači	buu	čipaali-nnee	o+či(n)-pu	informantami ¹⁰
like.that	1PL.NOM	altogether-PERS	become+PRF.P-1PL	[informants]

こうして、私たちはみんなインフォーマントになった。

(1-12)

bii	leenandoo	bələčixəpu	professoritəi,	balabalda	uilta
bii	leena-ndoo	bələči-xA(n)-pu	professori-tAi	balabalda	uilta
1SG.NOM	Lena-COM	help-PRF.P-1PL	professor-DIR ¹¹	quickly	Uilta

⁸ 北方言話者として池上先生のインフォーマントとなったMarija S. Mixeeva氏は、ウイлта名でGisiktəudəと呼ばれていた。

⁹ フェジャエワ氏の母親であり池上先生のインフォーマントとなったOl'ga N. Semjonova氏は、ウイлта名でOolganjaaと呼ばれていた。

¹⁰ ロシア語informant「インフォーマント」の複数造格形。ロシア語で動詞stat'を用いて「AがBになる」というとき、Bに当たる名詞や形容詞は造格形をとる。

narisal **bičixxəni** **puribuddooči.**
 nari-sAl bičixə+bA-ni nuri-buddoo-či
 man-PL book+ACC-3SG write-PURP-3PL¹²

私とレーナ¹³は教授を手伝った、はやくウイルタの人々の本を書けるように。

(1-13)

tari	professori	jiŋ	ulingaŋi	dooljiččookki	biččini,	xooni
tari	professori	jiŋ	ulinga-ŋi	doolji-či+bukki	bi+či(n)-ni	xooni
that	professor	very	good-INS	hear-ITR+HBT	COP+PRF.P-3SG	how

mamaril	ləədənŋiči,	təəlunučiči	təəlunumbə,
mamaril	ləədən-ri-či	təəlunuči+ri-či	təəlun(u)-bA
old.women	speak-IM.P-3PL	tell.legend+IM.P-3PL	legend-ACC

saxurreeči,	jaajjeeči.
saxuri+ri-či	jaaja+ri-či
tell.story+IM.P-3PL	sing+IM.P-3PL

その教授は、ばあさんたちが会話したり、昔話を語ったり、おとぎ話をしたり、歌ったりするようすを、とても注意深く聞いていたものだった。



ワール村で調査をする（左から）池上先生、A. V. セミョーノワさん、I. Ja. フェジャエワさん（井上紘一氏撮影；池上1993：8 [2001：292]より転載）

¹¹ 動詞の表わす動作の相手は、ウイルタ語では一般に対格-bAで表わされる。ここで方向格-tAiが用いられたのは、ロシア語の規範意識が影響したためと思われる。ロシア語では、動詞*dat*「与える」の表わす動作の相手は与格で表わされる。ウイルタ語では、動詞*buu*「与える」の表わす動作の相手は方向格-tAiで表わされる。こうしたことから、ロシア語とのバイリンガルである今日のウイルタ語話者は、ロシア語の与格がウイルタ語の方向格に対応するという感覚をもっているようである。結果として、フェジャエワ氏にも、ロシア語の*pomoch*「手伝う」の表わす動作の相手は与格をとるので、ウイルタ語の動詞*bələči*「手伝う」の表わす動作の相手は（ロシア語の与格に相当する）方向格、という類推が働いたと考えられる。

¹² ここでは、動詞の目的形に動作主が三人称複数（原則として「彼ら」の意）であることを表わす語尾がついている。これは、特定の人たちを指すのではなく、いわゆる不定人称として用いられている。ロシア語における三人称複数の不定人称用法を、ウイルタ語に適用した結果であると思われる。

¹³ ビビコワ氏の愛称。同氏とフェジャエワ氏は互いに従姉妹にあたり、幼少から親しい間柄である。

(1-14)

i	gəgdəkə	pəskəukki	biččini,	tari	mamaril
<i>i</i>	<i>gəgdəkə</i>	<i>pəskə+bukki</i>	<i>bi+či(n)-ni</i>	<i>tari</i>	<i>mamaril</i>
[and]	always	be.surprised+HBT	COP+PRF.P-3SG	that	old.women
jaajjeewači,	təəlunuččiwəči,	kəsəjjiči ¹⁴ .			
<i>jaajja+ri-bA-či</i>	<i>təəlunučči+ri-bA-či</i>	<i>kəsə-ji?-či</i>			
sing+IM.P-ACC-3PL	tell.legend+IM.P-ACC-3PL	language-INS?-3PL			

そして、ばあさんたちが彼ら自身のことばで歌ったり語ったりすることに、絶えず驚嘆していたものだった。

(1-15)

təəli	jij	anu,	asarami	kəssəəči,	jij
<i>təəli</i>	<i>jij</i>	<i>anu</i>	<i>asara-mi</i>	<i>kəsə+bA-či</i>	<i>jij</i>
then	very	FIL	take.care-COOR.CVB	language+ACC-3PL	very
asarami		jurrookkilil	biččiči.		
<i>asara-mi</i>		<i>juri+bukki-lil?</i>	<i>bi+či(n)-či</i>		
take.care-COOR.CVB		write+HBT-PL?	COP+PRF.P-3PL		

だからとても、そのあれ、慎重にことばを、とても慎重に記録したものだった。

(1-16)

tari	professori	ikegamisan	biččini	jij	uilələ!
<i>tari</i>	<i>professori</i>	<i>ikegami-san</i>	<i>bi+či(n)-ni</i>	<i>jij</i>	<i>uilələ</i> ¹⁵
that	professor	[Ikegami]-[san]	COP+PRF.P-3SG	very	hardworking

その教授、イケガミサンはとても働き者だった。

(1-17)

Xasultaddaa	panumi	geeda	kəssəə	muɲnawukki
<i>xasu-ltA=ddAA</i>	<i>panu-mi</i>	<i>geeda</i>	<i>kəsə+bA</i>	<i>muɲnaa-bukki</i>
how.much-MULT=EMPH	ask-COOR.CVB	one	language+ACC	worry-HBT
biččini,	mamarilba.			
<i>bi+či(n)-ni</i>	<i>mamaril-bA</i>			
COP+PRF.P-3SG	old.women-ACC			

何度も一つのことば（単語）について尋ねて、ばあさんたちを悩ませたものだ。

(1-18)

mamaril	xaaliddaa	əwwookkil	bičči,	xaaliddaa	əwwookkil
<i>mamaril</i>	<i>xaali=ddAA</i>	<i>ə+bukki-l</i>	<i>bi+či(n)</i>	<i>xaali=ddAA</i>	<i>ə+bukki-l</i>
old.women	when=EMPH	NEG+HBT-PL	COP+PRF.P	when=EMPH	NEG+HBT-PL

¹⁴ Ikegami (1956[2001])によると、この文脈では再帰所有人称（複数）**kəsəjjeeri** (*kəsə-jjeeri* ; language-PEF.PL.INS「自分たちのことばで」) が期待される。この部分は、**kəsəjji** (*kəsə-jji* ; language-PEF.INS「自分のことばで」) および**kəsəjjiči** (*kəsə-ji-či* ; language-INS-3PL「彼らのことばで」) との混用による誤りかと思われる。

¹⁵ 動詞語幹uilə-「働く」に不明の要素-**IA**がついたものと分析することができる。同様の形式は今日の北方方言で他にもtuksala (*tuksa-*「走る」+**-IA**) 「よく走る」、dəptulə (*dəptu-*「食べる」+**-IA**) 「よく食べる」、jaajala (*jaaja-*「歌う」+**-IA**) 「よく歌う」など生産的に用いられ、形容詞的に用いられる。**-IA**にどのような文法的な機能を認めるか、今後の検討課題としたい。

tagdaa biččiči.

tagda+rA bi+či(n)-či

get.angry+NIM COP+PRF.P-3PL

ばあさんたちは一度もしなかった……、一度も腹を立てなかった。

(1-19)

professori	ikegami	uiləmiddəə	jiŋ	asarami
professori	ikegami	uilə-mi=ddAA	jiŋ	asara-mi
professor	[Ikegami]	work-COOR.CVB=EMPH	very	take.care-COOR.CVB
uiləwukki	biččiini,	məənəddəə	ulinga nari.	
uilə-bukki	bi+či(n)-ni	məənə=ddAA	ulinga nari	
work-HBT	COP+PRF.P-3SG	REF.NOM=EMPH	good man	

イケガミ教授は、仕事の時も深い思いやりをもって働き、ご自身も良い人だった。

(1-20)

bii	professorimbə	ikegamisaannoo	goroo
bii	professori(n)-bA	ikegamisaanu+bA	goroo
1SG.NOM	professor-ACC	Ikegamisaanu+ACC	for.a.long.time=EXC

doolliwi.

doon-li-bi

remember-FUT.P¹⁶-1SG

私は教授を、イケガミサンを、いつまでも思い出すだろう。

2.2 ビビコワ氏の語り

(2-1)

soroŋee.

soroŋee

how.do.you.do

こんにちは。

(2-2)

bii	əsi	vspominajliwi	professori,	...	(doolliwi) ¹⁷
bii	əsi	vspominaj-li-bi	professori		doon-li-bi
1SG.NOM	now	[remember]-FUT.P-1SG	professor		remember-FUT.P.-1SG

doolliwi **professori** **dziro** **ikegami.**

doon-li-bi professori dziro ikegami

remember-FUT.P-1SG professor [Jiro] [Ikegami]

私はこれから教授について回想……、ジロー・イケガミ教授について回想します。

(2-3)

biččiini	geeda	minga	xuju	tanqu	xujundoo	ilaa
bi+či(n)-ni	geeda	minga	xuju	tanqu	xujundoo	ilaa
COP+PRF.P-3SG	one	thousand	nine	hundred	ninety	three

¹⁶ 形動詞語尾（未来）-liは、今日の北方言にしか見られない（山田2010a）。

¹⁷ ビビコワ氏がロシア語の動詞vspominat'「回想する」をウイルタ語未来形らしく述べたところ、横で聞いていたフェジャエワ氏が（ウイルタ語で）**doolliwi**だと訂正した。それを受けて、ビビコワ氏も同じように言い直した。

anani.

anani

year

1993年のことだった。

(2-4)

mumboopə	xəwəčixəči	xottotoi,	juzhnytai.
mumboopə	xəwəči-xA(n)-či	xotto-tAi	juzhny-tAi
1PL.ACC	call-PRF.P-3PL	town-DIR	[Yuzhno]-DIR

私たちは町へ、ユジノ・サハリンスクへ呼び出された。

(2-5)

buu	tari	kitazima	ljuba,	minato	sirjuko,	fedjaeva
buu	tari	kitazima	ljuba	minato	sirjuko	fedjaeva
1PL.NOM	that	[Kitazima]	[Ljuba]	[Minato]	[Sirjuko]	[Fedjaeva]

irina	jakovlevna,	i	biikkəə,	bibikova	elena.
irina	jakovlevna	i	bii=kkəə	bibikova	elena
[Irina]	[Jakovlevna]	[and]	1SG.NOM=AND	[Bibikova]	[Elena]

私たちというのは、キタジマ・リューバ、ミナト・シリユコ、フェジャエワ・イリーナ・ヤーコヴレヴナ、そして私ビビコワ・エレーナだ。¹⁸

(2-6)

xooni	bələčilipoo	əsipu	saara.
xooni	bələči-li-pu+kA	ə-si-pu	saa-rA
how	help-FUT.P-1PL+WHQ	NEG-IM.P-1PL	know-NIM

私たちはどうやって手伝え方がいいのか、わからない。



文字教本編集の打ち合わせをする池上先生（左）とビビコワ氏
(2000年、ユジノサハリンスク市 永山ゆかり氏撮影；ビビコワ氏提供)

¹⁸ キタジマ氏とミナト氏はポロナイスク在住の南方言話者である。このお二人と、北方言話者のフェジャエワ氏、ビビコワ氏の4名を池上先生が指導するかたちで、ウイльта語の教科書が編集された。長年の成果は、文字教本 (Ikegami et al. 2008) となって結実した。2008年4月の出版にいたるまで、資金調達などの問題で長い時間を要した。その経緯は、2009年6月2日に北海道大学で催した講演会でビビコワ氏が語っておられる (山田2010bに講演録)。

(2-7)

jiŋ meenjiŋpu.

jiŋ meen-ri-pu

very be.constricted-IM.P-1PL

私たちは気おくれしてしまう。

(2-8)

kəssəriləkə**saaripu****čipaalinnee.**

kəsə+bAri=lAkA

saa-ri-pu

čipaali-nnee

language+REF.PL=TOP

know-IM.P-1PL

altogether-PERS

みんな自分たちのことば（母語）ならわかる。

(2-9)

gə, baačixapu**jaŋgeeŋgoori.**

gə baači-xA(n)-pu

jaŋgee¹⁹-ŋu+bAri

INTJ meet-PRF.P-1PL

official-AL+REF.PL

さて、私たちは先生と対面した。

(2-10)

əə, jiŋ bərəmi nari maanissoo.

əə jiŋ bərəmi nari maanissoo

INTJ very submissive man apparently

「あれれ、とても大人しい人らしいな」【と思った】。

(2-11)

nooni**muttəi****unjiŋi,****əbuddoopu****ŋəəlləə.**

nooni

muttəi

un-ri-ni

ə-buddoo-pu

ŋəələ+rA

3SG.NOM

1PL.DIR

say-IM.P-3SG

NEG-PURP-1PL

fear+NIM

彼は私たちに言う、私たちが心配しないように。

(2-12)

nandəəkə**uiləŋəttəli,****unjiŋi.**

nandəəkə

uilə-ŋAttAli²⁰

un-ri-ni

slowly

work-IMP.1PL

say-IM.P-3SG

「ゆっくりと勉強しましょう」と言う。

¹⁹ jaŋgeeの語義について、南方言の辞書で「役人、警官、巡査」（池上1997: 87）、「役人、争いを裁定する長老」（潤瀾1981: 57）とある。一方、北方言話者のフェジャエワ氏が編集に関与したOzolinja & Fedjaeva（2003: 49）では「1) 長、2) 主、3) 演者、4) (古語で) 役人」と記述されている。かつては一義的に「役人」を指す単語であったと考えられるが、今日では目上の指導者に対して用いるようである。ビビコワ氏は池上先生のことを「私たちのjaŋgeeだった」と言う。本稿の和訳では「先生」とした。なお、親しみを込めて呼ぶときには、日本語を真似て「センセイ」と言う（例：(2-25)(2-29)）。

²⁰ ビビコワ氏への聴取にもとづく筆者の考察により、-ŋAttAliを一人称複数命令形「（私たちは）～しよう」とした。先行記述ではIkegami（1959 [2001: 37-38]）・池上（2001: 161）による南方言の形式-ŋA-ttAと類似するが、こちらは「かれはあとで～させろ」といった意味の三人称命令形（未来）であり、意味が相違する。例：ŋəəŋə-ŋə-ttə.「かれはあとで行かせろ」（池上2001: 161）

(2-13)

təli uilta kəssəni muttəi təluŋuči mi allauxani,
 təli uilta kəsə+bA-ni muttəi təluŋuči-mi allau-xA(n)-ni
 then Uilta language+ACC-3SG 1PL.DIR tell.legend-COOR.CVB teach-PRF.P-3SG

xooni kəssə nurripoo.

xooni kəsə+bA nuri²¹+ri-pu+kA
 how language+ACC write+IM.P-1PL+WHQ

そこでウイルタのことばについて私たちに説明しながら、どうやってことばを書き表わすのか、教えてくれた。

(2-14)

xaimi tarəŋači nurilipoo.
 xai-mi tarəŋači nuri-li-pu+kA
 what-COOR.CVB like.that write-FUT.P-1PL+WHQ

どうして、そのように書くのか。

(2-15)

xamačee biinee uilta kəsəni dōroni.
 xamačee bi+ri-ni+kA uilta kəsə-ni doro-ni
 what.kind.of COP+IM.P-3SG+WHQ Uilta language-3SG order-3SG

ウイルタのことばのきまりとは、どのようなものか。

(2-16)

dulluu buu orkinji uidəəxəpu nooni
 dulluu buu orki(n)-ji uidəə-xA(n)-pu nooni
 at.first 1PL.NOM bad-INS understand-PRF.P-1PL 3SG.NOM

tattuuriwani.

tattuu-ri-bA-ni
 teach-IM.P-ACC-3SG

最初、私たちは彼の教えることがよくわからなかった。

(2-17)

kəsəpu goi.
 kəsə-pu goi
 language-1PL different

私たちの「使う」ことばが違うのだ。

(2-18)

nooni poonilduni luča kəsəjini kəənjinī, čoočči
 nooni poonilduni luča kəsə-ji-ni kəən-ri-ni čoočči
 3SG.NOM sometimes Russian language-INS-3SG talk-IM.P-3SG after.that
angličaanu kəsəjini kəənjinī, poonilduni uilta kəsəjini
 angličaanu kəsə-ji-ni kəən-ri-ni poonilduni uilta kəsə-ji-ni
 English language-INS-3SG talk-IM.P-3SG sometimes Uilta language-INS-3SG

²¹ フェジャエワ氏は同じ動詞をpuri-と発音する。cf. (1-12)(1-15)

kəənʃini,	tuksə	biigini	sisə	kəsəʃini
kəən-ri-ni	tuksə	bi+rA(g)i-ni	sisə	kəsə-ʃi-ni
talk-IM.P-3SG	interpreter	COP+COND.CVB-3SG	Japanese	language-INS-3SG

kəənʃini.

kəən-ri-ni

talk-IM.P-3SG

彼は、ときにロシア人のことばで、イギリス人のことばで、ときにウイルタのことばで、通訳がいるときは、日本人のことばで話す。

(2-19)

buuləkə	duu	kəssə	saaripu,	luča
buu=lAkA	duu	kəsə+bA	saa-ri-pu	luča
1PL.NOM=TOP	two	language+ACC	know-IM.P-1PL	Russian

kəssəni,	məənə	kəssəəri.
kəsə+bA-ni	məənə	kəsə+bAri
language+ACC-3SG	REF.NOM	language+REF.PL

私たちは二つのことばを、ロシア語と自分たちのことば（ウイルタ語）を知っている。

(2-20)

muŋnaamari	tačixapu.
muŋnaa-mAri	tači-xA(n)-pu
worry-COOR.PL.CVB	learn-PRF.P-1PL

頭を悩ませながら、勉強した。

(2-21)

ʃaŋgeenupu	əsiniddə	paallee.
ʃaŋgee-ŋu-pu	ə-si-ni=ddAA	paali+rA
official-AL-1PL	NEG-IM.P-3SG=EMPH	scold+NIM

私たちの先生は叱ったりしない。

(2-22)

nandəkə	tattuurini.
nandəkə	tattuu-ri-ni
slowly	teach-IM.P-3SG

ゆっくりと教えてくれる。

(2-23)

saawooččini	buu	kəssəəppoo,	kəsəpu
saa-boon-či(n)-ni	buu	kəsə+bA-ppoo	kəsə-pu
know-CAUS-PRF.P-3SG	1PL.NOM	language+ACC-1PL	language-1PL

doromboni	saawooččini.
doro(n)-bA-ni	saa-boon-či(n)-ni
order-ACC-3SG	know-CAUS-PRF.P-3SG

私たちのことばを、私たちのことばのきまりを教えてくれた。

(2-24)

čoočči	bičixxə	andusiduppoo,	ʃiŋ	ʃaa	biččini.
čoočči	bičixə+bA	andu-si-du-ppoo	ʃiŋ	ʃaa	bi+či(n)-ni
after.that	book+ACC	make-IM.P-DAT-1PL	very	easy	COP+PRF.P-3SG

だから、私たちが本²²を作るのはとても簡単だった。

(2-25)

ikegami	sensei	jiŋ	aja	nari	biččiŋi.
ikegami	sensei	jiŋ	aja	nari	bi+či(n)-ni
[Ikegami]	[teacher]	very	good	man	COP+PRF.P-3SG

イケガミセンセイはとても良い人だった。

(2-26)

mørøni	jiŋ	ulinga.
mørø-ni	jiŋ	ulinga
mind-3SG	very	good

心もちがとても良い。

(2-27)

jeesilbi	jiŋ	asarami	biččiŋi.
jeesil-bi	jiŋ	asara-mi	bi+či(n)-ni
partners-REF	very	take.care-COOR.CVB	COP+PRF.P-3SG

自分の協力者たちに対し、深い思いやりをもっていた。

(2-28)

noomboni	saagačči	buu	ərgəpu	jiŋ	agjeeni.
noomboni	saa-kAčči	buu	ərgə-pu	jiŋ	agda+ri-ni
3SG.ACC	know-SUB.CVB	1PL.NOM	spirit-1PL	very	please+IM.P-3SG

彼と知り合ってから、私たちはとても幸せだ。

(2-29)

agdapsee	ikegami	sensei.
agdapsee	ikegami	sensei
thanks	[Ikegami]	[teacher]

ありがとう、イケガミセンセイ。

略号一覧

- : 形態素境界 / + : 融合 / = : 倚辞境界 / ? : 分析不能 / 1 : 一人称 / 2 : 二人称 / 3 : 三人称 / ABL : 奪格 / ACC : 対格 / AL : 譲渡可能接尾辞 / AND : 名詞句の並列「～と」 / CAUS : 使役 / CVB : 副動詞 / COM : 共同格 / COND : 条件 / COOR : 同時 / COP : コピュラ動詞語幹 / DAT : 与格 / DIR : 方向格 / EMPH : 強調 / EXC : 感嘆 / FIL : 言いよどみのフィラー / FUT : 未来 / HBT : 習慣 / IM : 不完了 / IPSN : 非人称 / INCH : 開始 / INS : 道具格 / INTJ : 間投詞 / ITR : 反復 / LNG : 派生接尾辞「～語で」 / NEG : 否定動詞語幹 / NIM : 否定にともなう不完了形動詞 / NOM : 主格 / P : 形動詞（分詞、動名詞） / PERS : 派生接尾辞「～人」 / PL : 複数 / PRF : 完了 / PRL : 沿格 / PURP : 目的 / REF : 再帰所有 / REV : 回帰 / SG : 単数 / SUB : 従属 / TOP : 主題化 / WHQ : 疑問詞疑問

²² ウイルタ語文字教本 (Ikegami et al. 2008) のこと。

参考文献

池上二良

- 1993 「最近のウイルタ語研究およびウイルタ語の現状」『アークティックサークル
北海道北方民族博物館友の会 季刊誌』6: 4-8, 北方文化振興協会〔2001『ツ
ングース語研究』: 284-293, 汲古書院〕.
- 1994 「ウイルタ語の南方言と北方言の相違点」『北海道立北方民族博物館研究紀要』
3: 9-38〔2001『ツングース語研究』: 247-283, 汲古書院〕.
- 1997 『ウイルタ語辞典』北海道大学図書刊行会.
- 2001 「ウイルタ語動詞活用大要」津曲敏郎(編)『環北太平洋の言語』7(文部省特
定領域研究(A): 環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究
A2-002): 157-166, 大阪学院大学.

澗潟久治(編)

- 1981 『ウイルタ語辞典』網走市北方民俗文化保存協会.

山田祥子

- 2010a 「ウイルタ語北方言にみられる動詞語尾-liについて」呉人恵(編)『環北太平
洋の言語』15: 85-100, 富山大学人文学部.
- 2010b 「【講演会等報告】講演と唄のタベ: サハリン先住民族言語を伝え、残す」『北
海道民族学』6: 60-67, 北海道民族学会.

Ikegami, J.

- 1956 “The substantive inflection of Orok”. 『言語研究』30: 77-96, 日本言語学会〔2001
『ツングース語研究』: 3-23, 汲古書院〕.
- 1959 “The verb inflection of Orok”. 『国語研究』9: 34-73, 国学院大学国語研究会〔2001
『ツングース語研究』: 24-66, 汲古書院〕.
- 1974 “Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen”. *Sprache, Geschichte und
Kultur der Altaischen Voelker, Protokollband der XII. Tagung der Permanent
International Altaistic Conference 1969 in Berlin*. 271-272. Berlin: Akademie-Verlag
〔2001『ツングース語研究』: 395-396, 汲古書院〕.

Ikegami, J., E. A. Bibikova, L. R. Kitazima, S. Minato, T. P. Roon, & I. Ja. Fedjaeva

- 2008 *Uiltadairisu: Govorim po-uil'tinski*. Juzhno-Saxalinsk: Saxalinskoe knizhnoe
izdatel'stvo.

Ozolinja, L. V. & I. Ja. Fedjaeva

- 2003 *Oroksko-russkii i russko-orokskii slovar'*. Juzhno-Saxalinsk: Saxalinskoe knizhnoe
izdatel'stvo.

Tsumagari, T.

- 2009 “Grammatical outline of Uilta (Revised)”. In *Journal of the Graduate School of
Letters*, Vol.4: 1-21. Sapporo: Hokkaido University.

Uilta Texts in Northern Dialect: Thank you, Ikegami-sensei

Yoshiko YAMADA

Hokkaido Museum of Northern Peoples

This paper aims to present two texts of the Northern Dialect of Uilta (one of the Tungusic languages, distributed on Sakhalin Island in Russia). The first text (1-1) ~ (1-20) is told by Ms. Irina Jakovlevna Fedjaeva who was born in the village Val (Nogliki District, Sakhalin Oblast, Russia) in 1940, and the second one (2-1) ~ (2-29) is by Ms. Elena Alekseevna Bibikova who was born in a camping place Dagi (the same of the above) in 1940. The present author recorded their narration in August 17th 2011 in Val.

On this paper the texts are transcribed with Roman-based symbols according to the phonological description by Ikegami (1997). The present author added the underlining forms, the morphological analysis and Japanese free translation.

Both of the speakers told about their own experiences with Prof. Jiro Ikegami and expressed respect and thanks to him. They became acquainted with him in 1990, when he visited Sakhalin for the first time. The two local ladies supported him to gather linguistic data on the Northern Dialect of Uilta. After that, they worked together to decide a writing system of the Uilta language and to produce its educational materials. The ABC-book published in 2008 (Ikegami et al. 2008) is indeed a fruit of their great collaboration. They remember that Prof. Ikegami encouraged the speakers of the endangered small language with his ardor for the study and his deep consideration for the people.